

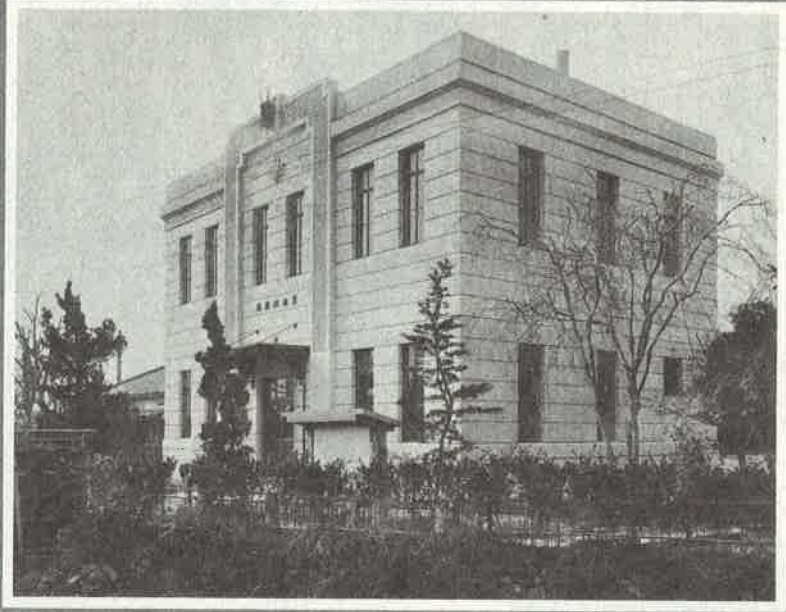
みのおのおいたち その12

箕面地区(七)

予定地は牧野八幡宮の西側でしたが、豊能郡長の不許可などもあって、阪急牧野駅の東隣りの場所になりました。

すが、その最大の原因は横井・箕面・桜ヶ丘・百楽荘の住宅街がつくられたことによるでしょう。また電車の開通で、箕面駅

箕面村役場



電車の開通に先立つ明治四一年と四二年、当時の箕面村では西小路地区の箕面川べりにあった役場と学校を牧野地区に移して、予想される地域の発展に備えました。ちなみに、新校舎の

ところで下表は、戦前における箕面地区の戸数と人口を示したものです。年を追って大幅に増加していったことがわかります。

周辺から滝道筋にかかる商店街とまちなみも形成されました。地区内のこうした変化に伴って、地域の産業構造、とりわけ

農業事情が変わってきました。(詳細は市史本編三を参照)

相次ぐ住宅地の建設で農地が減少し、生産品も変化しました。

江戶時代から良質の酒造米産地の一つであった地区の米づくりと、明治に入ってから盛んになったミカンなどの果実栽培が減り、これに代わって植米などの觀賞用植物と野菜づくりが盛んになってきました。農地の減少の結果、限られた耕地での収入を図るために、生産性の高い作物を集約的につくる方向に進んだのです。こうして昭和一〇年ころの箕面村は、大都市近郊の園芸農業地になっていました。

ところが、昭和一二年ころを境にして、以後の地区産業は大きな変化を示すことになりました。たとえば、地区の生産価値の過半を占めてきた農産物が減少し、機械・器具の製造を中心とした工業生産が主流になりました。日中戦争の長期化に伴う戦時経済の発展、また神戸と京都を結ぶ産業道路(今の国道一七一号)の開通などによる社会的条件の変化で、箕面地域はもはや農業地域と呼べない状態

になりました。

そのため、昭和二二年当時には「本村は戸数三千七百戸、人口一万六千七百余人を有し、箕面線桜井・牧野・箕面各駅付近は商店軒を連ね、住宅地又街衝をなし、各種会社二十余、工場十余を算し……」(市史本編三)という状況になったので、昭和二三年一月一日から町制を施行しました。

同年八月一日には、止々呂美・萱野村を合併して町勢の伸展した箕面町の一地区になり、昭和三二年一月一日の市制施行によって、その一部に変わりました。

表 地区の戸数と人口数

年次	戸数	人口数	男	女
大正4年	—	3,641	1,819	1,822
10年	930	4,938	2,531	2,407
昭和2年	1,413	6,218	3,128	3,090
7年	1,798	8,162	3,921	4,241
11年	2,118	9,975	4,883	5,092
15年	2,517	12,011	5,997	6,024
17年	2,693	13,319	6,643	6,676
18年	2,716	12,118	5,534	6,584